

三次元X線「トモシンセシス」導入や 膝ドックで注目の「関節センター」

社会医療法人北斗 北斗病院 帯広市稲田町基線7番地5
☎(0155) 48・8000

道東の中核医療を担う社会医療法人北斗（鎌田一理事長）の北斗病院では、センター化構想を推進している。そのうちのひとつ、「関節センター」では治療と診療、予防医学に力を入れており、その全国的にも珍しい取り組みは、医療関係者の耳目を集めている。

世界最先端の

解剖学的二重束再建術

急速な高齢化に伴い、変形性関節疾患の患者が増加傾向にある。専門的かつ最適な医療を提供するため、道東では初となる「関節センター」（石田直樹センター長）が08年に開設された。



石田 直樹センター長

石田センター長は北海道天塩郡豊富町出身、旭川医科大学卒業。札幌、旭川、函館、八雲

疾患の成人三大疾患における予防医学に取り組み、道内医療の先駆的な役割を担う同法人だが、センター化構想

急遽な高齢化に伴い、

変形性関節疾患の患者が増加傾向にある。専門的かつ最適な医療を提供するため、道東では初となる「関節センター」（石田直樹センター長）が08年に開設された。

石田センター長は北海道天塩郡豊富町出身、旭川医科大学卒業。札幌、旭川、函館、八雲

スタッフも約100名と、全国トップクラスを誇る。

また、3次元的な撮影が可能な最新のX線撮影装置「トモシンセシス」を道内で初めて導入。従来のCTによる撮影は人工物が光り輝いて周囲が見えなくなる現象が起きるが、トモシンセシスは金属も含めて表現できるため人工骨と自己骨との癒合経過など、精密な情報を得ることができ、撮影時間も10数秒で済み、さらに部位によって差異はあるが被爆量もCTの10分の1程と、メリットは大きい。

主な対象疾患は変形性膝関節症や変形性股関節症、関節リウマチ、スポーツ外傷など。特に身体への負担に繋がりにくい変形性膝関節症が多いという。

十勝



一例を丁寧に、向上心を持って地道に経験を積み、いくことが大切」と石田センター長は語る。

関節リウマチは、関節滑膜の破壊性多関節炎により、関節や骨が損傷する疾患。関節が変形してしまい手術が必要な場合には、鏡視下滑膜切除術や人工関節置換術で対応。鏡視下滑膜切除術は関節

や骨が大きく損傷して

いない場合に適応し、手術時間は1時間ほど。骨の損傷が大きい場合は滑膜を切除し、人工関節置換術をおこなう。

十勝管内はスポーツが盛んで、若い世代のスポーツ外傷も多くみられる。バスケットボールやバレーボール、サッカーなどでみられる前十字靭帯損傷には前十字靭帯再建術を実施する。

とりわけ、世界の靭帯治療を牽引する北海道大学の安田和則教授が基礎データ、基礎研



鎌田 一理事長

究を重ね開発した、関節鏡を使用する「解剖学的二重束再建術」を実施。従来の前十字靭帯再建術は、1本の靭帯を再建していたが、同手術は本来の解剖により近づけるため2本の靭帯を再建するとい

う、世界的にも評価が高い最先端術式だ。また、従来の前十字靭帯再建術は10〜20ほどの切開が必要であったが、同手術は1〜2の切開が2カ所と4〜5程度の1カ所の切開だけで済み、低侵襲手術であり、手術時間が2時間程度、

の切開が必要であったが、同手術は1〜2の切開が2カ所と4〜5程度の1カ所の切開だけで済み、低侵襲手術であり、手術時間が2時間程度、

の切開が必要であったが、同手術は1〜2の切開が2カ所と4〜5程度の1カ所の切開だけで済み、低侵襲手術であり、手術時間が2時間程度、

膝ドック開設に向けた

リハビリ教室や啓蒙活動

入院期間は従来の1ヵ月半から2週間に短縮される。成績も良好で、関節鏡により治療箇所が拡大されるため細かな治療、程度の高い手術を提供できる。

石田センター長は同術式を安田教授のもとで習得。今までおよそ100例ほどの手術をおこなっており、管内

同院の理学療法士、作業療法士100名のうち、整形外科専門チームは15人ほど。薬剤師や介護福祉士、脳神経外科などと連携しリハビリにあたる。マンツーマン指導を基本とし、手術後の日数や患者の病状に即したりハビリは好評だ。また、新規の患者を含め病態

で最先端手術を受けることができる。リハビリは筋力や筋肉のつき方、靭帯の治癒程度を考慮する必要があるため、退院後は通院によるリハビリをおこなう。さらに傷口が小さいことから、患者の精神的負担の軽減、美容を気にする女性にも勧められる手術となっている。

をチェックするカンファレンスを週1回実施。チームワークを重視した治療プログラムとなっている。

今年5月には北海道大学大学院保健科学研究院（札幌市）と連携し、寄附講座として「北斗関節機能障害予防学分野」を3年計画で開設。同研究は障害予防

を重視したもので、全国的にも珍しい研究領域。同大学院から武田直樹教授が月2回診察に訪れ、同院と連携しながら研究と人材育成に取り組んでいる。

また、膝の状態をチェックし、予防指導などをおこなう「膝ドック」の開設を目指す。現在は患者や希望者を対象とし、膝の痛みリハビリ教室を開き、面談や指導をおこなっている。同教室では三次元動作解析装置を活用し、膝の動きを精密に調べ、生活指導や、一人ひとりに合ったトレーニングプログラムを作成し、リハビリを進めている。

その他に、関節フォロラムや講演会など、地域への啓蒙活動も積極的におこなうなど、

膝ドック開設に向け活動を開始している。「自覚症状のない靭帯損傷を抱えている人や、膝に不安を抱いているスポーツマンも多く、膝ドックは予防医学の柱になる。早期の予防により症状の悪化を防ぐことができるので、今後も市民に啓蒙していきたい」と石田センター長は語る。

鎌田理事長は、「センター化は患者さんの専門的治療の指標になり、医療の専門化が進んでいる現代のニーズにも適応している。また、高齢社会のなか関節疾患は増加傾向にあり、近年は治療やリハビリも改良されつつある。時代のニーズに合わせ当センターを構築する意味は極めて大きい」と期待を寄せる。